

熊本県博物館ネットワークセンターだより 熊本の自然と文化

編集・発行 熊本県博物館ネットワークセンター
2021年3月26日



No. 48

イベント情報（令和3年3月～令和3年6月）

企画展

会場：熊本県博物館ネットワークセンター

入場無料

第5回企画展 「海辺の植物」

○開催期間：令和3年3月30日（火）～5月30日（日）



ハマボウの標本（博物館ネットワークセンター所蔵）

夏になると恋しくなる海辺ですが、海の水の塩分、強い日差しによる高温と乾燥、波や風で絶えず動かされる地面など、植物にとっては過酷な環境です。そこで生活する植物たちは、その過酷な環境を乗り越える様々な特徴を持っています。また、熊本県の海岸には、干潟・砂浜・岩石海岸など多様な環境があり、それぞれの環境に適応した植物が生育しています。

この展示では、熊本県の海岸とそこに生育する海辺の植物たちを、当センター所蔵の標本や写真で紹介いたします。



ハマボウの花

ツルナの花

移動体験教室・講師派遣

博物館ネットワークセンターでは、学校やPTA活動、子ども会活動などで利用できる、移動体験教室を行っています。また、学校や教育施設等への職員の講師派遣も受け付けています。詳細は博物館ネットワークセンターホームページをご覧ください。

<移動体験教室プログラム> 化石レプリカを作ろう・貝殻クラフト・葉脈標本でしおりを作ろう・古銭レプリカを作ろう・石臼できな粉団子づくりなど。

ご来館の皆様へのお願い ～新型コロナウイルス感染症対策について～

- 入館の際はマスクの着用をお願いします。
- 入館時に、設置している消毒液による手指の消毒をお願いします。
- 氏名・連絡先、健康状態の記入をお願いします。※感染症拡大防止策以外の目的では使用しません。
- 館内では、周囲の人と2m程度の間隔を取ってください。
- 展示室の最大人数を10人程度とするために、入室をお待ちいただく場合があります。

No. 249
植 物

ハマナツメ *Paliurus ramosissimus* (クロウメモドキ科)



図1 天草市で採集されたハマナツメ

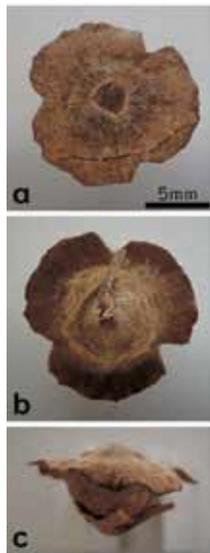


図2 ハマナツメの果実
a: 上面 b: 下面 c: 側面

海岸近くの林に生える落葉性の低木です。熊本県では、水俣市、天草市、上天草市などでの生育が確認されています。図1の標本は天草市で採集されました。同科別属のナツメ *Ziziphus jujuba* に似ていることからついた和名のようです。葉は4cm前後のやや広い卵型で、縁には小さな鋸歯があります。葉の脈は1本の主脈と2本の側脈が目立つ「三行脈」です。この葉脈の特徴はナツメにも見られます。

一方、果実はお皿を伏したような形の乾果で、その縁は三裂し翼状に広がります(図2)。食用となるナツメの果実(液果)とは全く似ていません。このハマナツメの果実は固く、乾燥しており、熟しても裂けたり、割れたりして種子が出てくることはありません。そのため、軽くて海水に浮き、種子を塩分濃度の高い塩水から守ることができます。ハマナツメは種子を遠くへ運ぶのに海の水の動きを利用しているのです。

ハマナツメは、「レッドデータブックくまもと2019」では、絶滅危惧Ⅱ類(VU)に選定されています。海岸という限られた環境に生育するハマナツメはもともと希少なうえ、海岸の工事などの環境の改変や自然の遷移で生育に適した環境が少なくなっており、絶滅の危機が増大していると考えられています。(前田 哲弥)

No. 250
地 学

フウ(台湾フウ)の化石 *Liquidambar formosana*

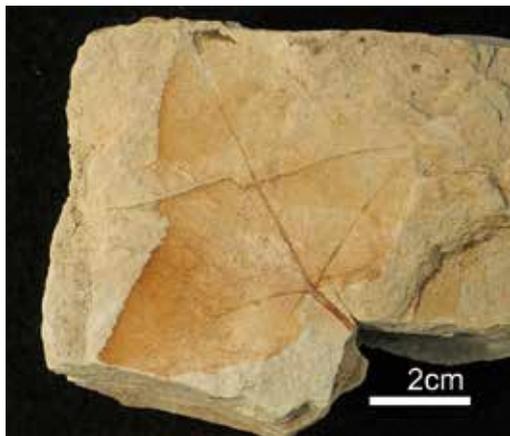


図1 フウの化石

外国から日本に持ち込まれた植物の中には、かつて日本に自生していたものがあります。フウの仲間もその一つです。

フウは台湾フウとも呼ばれる中国南部や台湾原産の樹木で、18世紀はじめ頃の江戸時代に日本に持ち込まれ、庭木や公園の木、街路樹として植えられています。葉の先端は3つに分かれ、手のひらのような形をしています。漢字では「楓」と書き、葉の形がカエデのなかまに似ていますが、違う植物のなかまです。

図1は山鹿市鹿北町で産出した葉の化石です。約300~400万年前に湖で堆積してできた地層から産出しました。図2の植物



図2 フウの標本

全体の色や葉脈の特徴などから、フウの葉の化石であることがわかります。

フウのなかまは、約1億年前に現れ、約1000万年前には北半球に広がっていました。日本でも約800万年前の地層から数種類のフウの化石を産出しています。しかし、約260万年前から氷河期に入ると、寒冷化によって分布域が狭まり、種類も減りました。日本では、氷河期に入ると姿を消してしまいました。

フウの化石は、この植物がかつて熊本でも自生していたことを示しています。(廣田 志乃)

No. 251
民俗

天秤棒

人の力で物を運ぶ方法には手で持つ、背負うなどがあり、少ない力で運べるように様々な道具が工夫されてきました。肩に担いで運ぶときには、長い棒に荷物を下げる方法が広く行われていました。大きなものや重いものは、棒の中央に荷物を下げ、前後を二人で担いで運んだりしますが、一般的に行われていたのは、棒の中心部を肩に担ぎ、棒の両端に桶おけや籠かごなどを吊り下げて一人で運ぶ方法で、これには天秤棒という道具が使われていました。天秤棒という呼び名は主に東日本で使われていたものです。熊本県では担ぐことをニナウ・イナウという事からニナイボウ、イナイボウと呼ぶところが多いようですが、ほかにもロクシャク、ボクトウ、サシなど、様々な呼び名が使われていました。



天秤棒（上益城郡甲佐町）

写真は上益城郡甲佐町で大正時代から昭和の中頃まで様々な荷物の運搬に使われていたもので、モッコボウと呼ばれていました。写真では分かりづらいのですが、160cmほどの棒はやや平らに削られており、中央部の肩に当たる部分はやや太くなっています。材は不明ですが、一般には椋むくや杉など弾力性のあるものがよいとされています。これらはなるべく疲労少なく運ぶための工夫です。両端にある突起は吊り下げる荷の縄の滑り止めですが、特に水桶やバケツを運ぶ時には、股木またぎや針金の鈎かぎをつけた縄を両端に下げた専用の天秤棒を使うこともありました。（迫田 久美子）

No. 252
動物

ユビナガコウモリ *Miniopterus fuliginosus*（ヒナコウモリ科）



図1 ユビナガコウモリ標本
（五木村産）

ユビナガコウモリ（図1・2）は、出産および、^{ほいく}哺育、冬眠、休息を洞窟で行う洞窟性コウモリの一種です。複数の洞窟を季節的に使い分けていますが、本種が利用できる洞窟にはある程度の広さが必要なようで、限られた洞窟に多数の個体が集まります。他のコウモリと比べて細長い^{つばさ}翼が特徴で、この翼によって、ときに数百 kmにも及ぶ長距離の季節的移動を行います。

熊本県では、球磨郡球磨村の^{おおせどう}大瀬洞や五木村の^{つづらせどう}九折瀬洞が九州でも最大規模の冬眠場所として知られていますが、前者は昨年7月の豪雨により^{じんだい}甚大な被害を受けた地域であり、後者もまた、その豪雨により再燃したダム計画によって洞窟が水没の危機に^{さら}晒されています。

「レッドデータブックくまもと2019」では本種は準絶滅危惧となっていますが、主要な生息地を取り巻く状況が発刊後に大きく変わったことから、今後の動向に注意が必要な種と言えるでしょう。

図1の標本は、1999年に九折瀬洞で採集されたものです。これからも熊本県の洞窟にたくさんの本種が変わらず見られることを願ってやみません。（中園 洋行）



図2 冬眠中のユビナガコウモリ（五木村）

No. 253
歴史

書簡（高森町瀬井家資料）

この資料は、甲斐有雄^{かいありお}へ宛てて長野一誠^{ながのいっせい}から送られた書簡（図1）です。内容は、甲斐有雄の道標建設に対して感謝を述べたもので、長年にわたって南郷地域^{なんごう}（現在の南阿蘇村・高森町）に数百の道標を建設したことによって人々の行き来が便利になったので、謝礼として目録の品物を贈る、と書かれています。目録（図2）は別に作られ、金3円と裕1枚が贈呈品として記されています。



図1 書簡

宛名にある甲斐有雄は阿蘇郡尾下村^{おくだりむら}（現・高森町）出身で、石工として生計を立てる傍ら、複雑に道が入り組む阿蘇郡において、交通の便を図って石道標を建設したことで知られています。石道標の建設は文久元年（1861）からおおよそ50年にわたって続けられ、その数は明治41年（1908）には1900基に達したといわれます。また、建てられた場所は阿蘇郡にとどまらず、飽託郡、上益城郡のほか、大分県や宮崎県にも広がっています。この功績から、昭和33年（1958）に熊本県近代文化功労者に選ばれています。

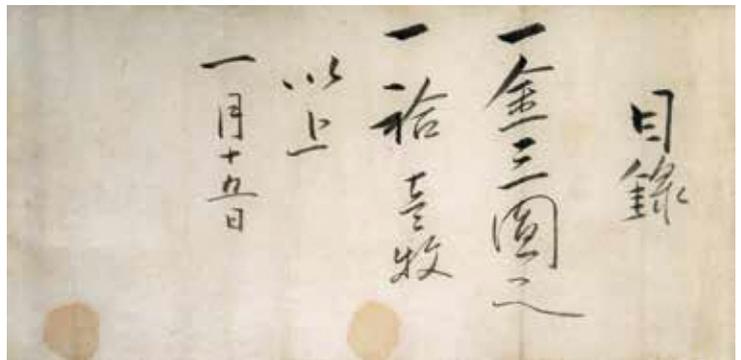


図2 目録

送り主の長野一誠は阿蘇郡久木野村（現・南阿蘇村）出身で、南郷地域の産業開発、地域振興に貢献した人物です。私財を投じて学校を建設し、阿蘇商社の創設による実業の振興を図り、また養蚕の奨励による副業の増進や、米穀品評会の開催、織物工場の設立による経済振興に努め、とりわけ戸下^{とした}（現・南阿蘇村河陽）を通して南郷と熊本を結ぶ道路の建設に尽力しました。長年にわたる地域振興への貢献から、明治25年（1892）に藍綬褒章^{らんじゆほうしょう}を受け、昭和43年（1968）に熊本県近代文化功労者に選ばれました。

甲斐有雄の道標建設は、熊本藩や熊本県から複数回にわたって褒賞されていますが、この資料から、地元の南郷地域においても評価を受けていたことがわかります。（古澤 広大）

熊本県博物館ネットワークセンター

〒869-0524 宇城市松橋町豊福 1695
TEL: 0964-34-3301 FAX: 0964-34-3302
E-mail: hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp
HP: <https://kumamoto-museum.net/kmnc/>
[公共交通機関]

○九州産交バス

松橋バスターミナルより宮原経由
八代産交行き「希望の里入口」下車

○JR

松橋駅より約 3 km

